

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成果報告書

平成26年10月29日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 医学研究科人間健康科学系専攻

職名・学年 修士課程2年

氏名 堀 田 孝 之

助成の種類	平成26年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	国際学会 BE ACTIVE 2014		
発表題目	Functional Movement Screen and previous injuries in track and field athletes		
開催場所	オーストラリア・キャンベラ		
渡航期間	平成 26年 10月 15日 ～ 平成 26年 10月 18日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会計報告	交付を受けた助成金額	250,000円	
	使用した助成金額	250,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	学会参加費	47,000円
		往復航空券	120,000円
		宿泊費	24,000円
滞在費		59,000円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 今回助成金をいただけたこと大変感謝しております。私は助成金をいただけるということで、国際学会への投稿を決意しました。そして、実際に国際学会に参加できたことで、海外の有名な研究者の方々の発表を直接お聞きし、直接お話もできたことで、人脈ができ、今後の研究デザインのアイデアもつかめたため非常に良い経験になりました。		

## 成果の概要／堀田孝之

この度、京都大学教育研究振興財団の助成を受けて、2014年10月15日から18日にかけて、オーストラリア・キャンベラで開催された Be Active 2014 に参加したため、その成果をここに報告する。

### <研究集会の概要>

研究集会名：Be Active 2014

主催者：オーストラリアスポーツ医学会 (Sports Medicine Australia)

開催場所：オーストラリア キャンベラ ナショナルコンベンションセンター

BE ACTIVE 2014 は Australian Conference of Science and Medicine in Sport (ACSMS) と National Physical Activity Conference (NPAC)、National Sports Injury Prevention Conference (NSIPC)、3つの学会が合同開催されたものである。今年は4日間にわたって行われ、欧州を中心とする世界50ヶ国の約1300名が出席し、上述した分野に関するシンポジウムや口述発表、ポスター発表が行われた。会議における中心的トピックは身体活動量と健康、スポーツ障害予防であり、子どもから労働者、高齢者まで様々な対象における各国の調査や運動介入の実績が数多く報告されていた。

報告者にとって今回が初めての国際会議の参加であったが、様々な分野の発表を聴き、世界各国で行われている最先端の研究内容に触れたことで、研究者として大きな刺激を受けた。また、国際的に著名な先生による「トレーニングの負荷量と障害発生」に関するシンポジウムを聴けたことで、障害予防分野の研究に関する理解が深まり、今後の研究デザインを考える際のアイデアを多く得られたため大変有意義であった。

### <発表内容の概要>

報告者は、学会2日目のポスターセッションにおいて、「Functional Movement Screen and previous injuries in track and field athletes (大学生陸上競技選手における Functional Movement Screen (FMS) と過去1年間のケガとの関連)」という題目でポスター発表を行った。

陸上競技において、ランニング障害に悩む選手の増加が問題となっている。その予防のため、障害リスクを事前に判定する取り組みとして筋力評価や柔軟性評価などのメディカルチェックが行われてきた。しかし、従来の方法では選手の身体の使い方を評価できず、障害判定指標としては不十分だと考えられていたため、今回 FMS に着目した。FMS は身体の使い方をスコアリングする障害リスク判定指標であり、他のスポーツにおいてその妥当性は示されている。しかし、未だ陸上競技において FMS の妥当性は示されていない。よって、本研究では FMS

を陸上選手に実施し、過去1年間の障害発生との関連を検討した。

対象は大学生陸上選手とした。解析は短距離群と中長距離群に2群に分けて行い、カイ二乗解析およびロジスティック回帰分析を用いて、FMSスコアと過去1年間の障害発生との関連を検討した。その結果、短距離選手群、中長距離選手群の両群において、カイ二乗検定よりFMSスコアが低い群は障害発生割合が有意に高く、回帰分析より障害発生にFMSスコアが有意に関連していることが明らかとなった。本研究より、陸上選手においてもFMSと障害発生との間に関連があることが明らかとなった。今後陸上選手の障害予防活動を行なうにあたり、FMSの有効性が示唆された。

今回のポスター発表を通して、同分野の先行研究者や他の研究者との情報交換を行い、今後の研究デザインについて再考することができ、非常に有意義な経験となった。また、発表も情報交換もすべて英語であったが、自分の英語力不足を実感できたことで英語への勉強意欲が非常に向上した。最後に、これらの経験を通して海外の研究者らと交流し、人脈を築けたことが一番の収穫であったと感じる。

#### <謝辞>

最後になりましたが、今回の国際研究集会の参加を助成して頂き、発表の機会を与えて下さった京都大学教育研究振興財団に心より厚く御礼申し上げます。京都大学教育研究振興財団の益々の御繁栄を心より御祈り申し上げます。